

トルコ語とチュルク諸語のナル的表現

栗林裕 (岡山大学)

1.1 はじめに

トルコ語とはトルコ共和国イスタンブール方言を指し、チュルク諸語の中で最大の話者数(約8千万人)を保持している言語である。チュルク諸語とは東アジアから中央アジア、中東および欧州地域に分布しており、主にOV語順の類型論的諸特徴を有するチュルク系の諸言語の総称で、ナル的表現はol-/bol-の形式で生じる。

1.2 トルコ語のナル的表現の基本的用法

トルコ語の代表的な辞典である大トルコ語辞典は、olmak (ナル)について次のように記述している。

1. 出現すること、発生すること
2. 実現すること、あるいは、作られること
3. 職能、地位、評判あるいは、性質を持つこと
4. あるものを入手すること、手に入れること
5. ある状態から別の状態に推移すること (トルコ語大辞典 2025) (<http://www.tdk.gov.tr/>)

つまり、出現や存在・発生が最も基本的意味であり、そこに状態変化の意味が加わり、最終的には25項目の意味が辞書の項目として登録されて多義語であり、発生・変化・完成の全てのアスペクトと結びつく。ol-は主動詞としての用法、補助動詞としての用法に分類できる。(1)は主動詞としての用例であり、(1a)では「出来」を表し、(1b)では主語の変化を結果補語とする「変化」を表す用例である。

(1) a. Domates ol-du.

トマト ナル-PST

「トマトが熟した。」

b. (Ben) öğretmen ol-du-m.

私 教師 ナル-PST/PFT

「私は教師になった。」

さらにナル表現的は拡張形式として文全体を補部にすることが可能である。(2b)ではナル的表現 ol-が文全体の[Biz-e gel-mez]を補部としてとり、ol-は始動のアスペクトの機能をもつ。

(2) a. Biz-e gel-mez.

私たち-DAT 来る-NEG/AOR

「私たちのところに来ない。」

b. [Biz-e gel-mez] ol-du.

私たち-DAT 来る-NEG/AOR なる-PST/PFT

「私たちのところに来なくなった。」

さらにトルコ語にはスル的補助動詞 (et-, yap-) やナル的補助動詞 (ol-) の他に、語彙的意味が希薄な一連の機能動詞 (ver-ヤル, gel-クル, git-イク 等) があり、ol-と対立的である(栗林 2025)。

(3) a. zahmet ol- (面倒 なる)厄介・面倒である、世話になる、厄介になる

sıkıntı ol- (困難 なる) 困る

b. zahmet ver- (面倒 与える) 厄介・面倒をかける

sıkıntı ver- (困難 与える) 厄介・面倒をかける

例えば、(4a-5a)では主語が受動的・被動者的であるが、(4b-5b)は能動的・行為者的になる。

(4) a. zahmet ol-du-m. (私は)厄介・面倒になった。

面倒 なる-PST-1.SG

b. zahmet ver-di-m. (私は)厄介・面倒をかけた。

面倒 与える-PST-1.SG

(5) a. zahmet çek- 苦労する、骨をおる

b. zahmet et- (人のために)心配する、仕事をする

以上をまとめるとトルコ語のナル的表現 *ol-*は、まず本動詞と補助動詞としての機能に分類され、本動詞としては(1)のように単独で自動詞として生起が可能であるが、補助動詞としては(3a-4a)のように主に外来語起源の動名詞や名詞を補語としてとり、その拡張形式として(2b)のように文も補部として従えることが出来る。語形成の観点からその生起は三つのレベル、すなわち語のレベルと句と文のレベルで区別される。注意しなければならないのは、トルコ語の場合、語や句レベルではスルの表現(*et-*)とナル的表現(*ol-*)の対立がみられるが、節や文レベルの補部を従える場合、ナル的表現(*ol-*)は可能だが、スルの表現(*yap-*)は現れることがなく通常の動詞述語で表されるので、語・句レベルと節・文レベルでの非対称性が見られる。2.では、この点についてもさらに考察する

2.1 出来局面と変化局面

「実がなる」のような「出来」を表す場合は、ゼロの起点 *X* からなにか新しい存在の出現 *Y* と捉えることができ、話者がどのように事態を把握して言語化しているのかが反映される。*X*<起点>カラ *Y*<到達点>ニナルの状態変化について起点言及と到達点言及の場合として次のようなスキーマが提示されている(池上 2025)。

(6) a. *X* (起点) → *Y*<話題 (主格)> 出来局面

b. *X*<話題 (主格)> → *Y* (到達点) 変化局面

トルコ語のスル(*yap-*)とナル(*ol-*)の交替に見られる派生は、上記のスキーマが 1)名詞化においても言語化されること、2)名詞化の際に両者の区別が明示化できること、を示す。トルコ語では(7a)のように奪格で表される起点を伴った名詞化による複合名詞が可能である。起点を伴った句が名詞化される例は、*yufka-dan lahmacun* (ユフカから作ったトルコ風ピザ) や *buz-dan heykel* (氷から作られた彫像) など比較的生産的な語形成の手段である。しかし句が名詞化される際には、(7a)が適格であるのに対して、(7b)は適格ではない。

(7) a. *Kar-dan adam yap-ım-ı* 「雪だるまの作り方」

雪-ABL ひと スル-NMZ-CM

b. **Kardan adam ol-uş-u* 「雪だるまの成り立ち」

雪-ABL ひと ナル-NMZ-CM

つまり、トルコ語の名詞化においては起点から構成される出来局面はスルの要素 *yap-*により行為者を含意することなしには言語化できない。逆に到達点と共に構成される(8)のような変化局面では、行為者が含意されないことから、トルコ語のナル的表現とは典型的には変化局面における言語化であると解釈されるかもしれない。

(8) *Japonya'nın teslim ol-uş-u* 「日本の降伏」

日本-GEN 降伏 ナル-NMZ-CM

この後の 2.3 で、変化局面における言語化ではないことを論じる。

2.2 補部に文をとる場合の点的表現

現代トルコ語と系統的に同じ言語分類であるチュルク諸語南西グループに属するガガウズ語 (モルドバ共和国の 2024 年の統計では話者数 98,200 人) は、例外的に VO 語順をもつチュルク語のひとつとして知られている。ガガウズ語は、主にブルガリア、モルドバ、ウクライナに居住するキリスト教徒のトルコ系少数民族により話されている言語であり、大多数のチュルク諸語とは異なる語順に変化したのはスラブ系の言語からの影響であると考えられている。(9a)はガガウズ語の 7 年生向けの教科書からの例であり、本動詞が従える従属節は *-mee* が付加することにより不定詞節になっている。また(9b)はガガウズ人自治区で刊行されている新聞記事の電子版からのものであり、出来の本動詞 *ol-*は事象を表す従属文に先行している(カギ括弧及び下線部は発表者による)。

(9) a. insan-da ol-du [kolaylık sözleş-mee...] GAGAUZ DİLİ p. 41 点的
人-LOC ナル-PST 簡単 言葉のやり取り-INF

「ヒトの間で簡単に言葉のやり取りができるようになった...」

b. Kasım ayın 9-da Komrat-ta ol-du [Gagauziya öndercileri tarafından kurulan “Gagauz şarap yortusu”],...

12月 9日 K. -LOC なる-PST G. リーダー達 よって 設立された G. ワイン祭り

「12月9日にコムラットでガガウズ自治区のリーダー達によって設立された「ガガウズワイン祭り」があった...」

ANA SÖZÜ 2024.11.11 点的

(9)では節全体に対して *ol-*が節の初頭に位置しており、現代トルコ語では受け入れられない語順であるが、ガガウズ語では散見される。ガガウズ語基本語順は VO とされるが、VO 語順がすべての局面で一貫しているわけではない。(9)のように、本動詞の場合は VO 語順を維持していることも多いが、(10a)のように「出来」の意味の主動詞や、(10b)のように助動詞(複合語 *pişman ol-*の一部)の場合は、補部が前接した OV 語順になる。

(10) a. *Ötөөгүн festival ol-du.*

GAGAUZ DİLİ p.202

一昨日 祭り ナル-PST

「一昨日、お祭りがあった。」

b. *Uşak genä pişman ol-du, ani onun anası yok...*

GAGAUZ DİLİ p.174

子供 再び 残念 ナル-PST RP 彼の 母親 ない

「子供は再び、自分に母親がいないことを後悔した。」

このような違いは、複合動詞として補部と主動詞や助動詞 *ol-*が緊密な形態関係にある場合に、OV 的特徴が維持されるという傾向による。こうした結合が緊密である場合に(8)で見たような名詞化が成立している。

2.3 まとめ

2.1 ではトルコ語のナル的表現が変化局面における言語化である例をみたが、これらは、複合動詞として典型的には外来語や抽象名詞である語幹部分と *ol-*が緊密な関係にある場合である(類例: *hazır oluş* 準備すること, *şişlik oluş* 腫れ物が出来ること, *sünnet oluş* 割礼すること)。つまり、補部+*oluş* (ナルコト)で複合名詞化される例はほぼ常に点的(非漸次的)な状態変化を表し、外部に表示される唯一項である主語は意味的に被動者あるいは被動物になる。以上のような語レベルで形成される補助動詞的な *ol-*と、ガガウズ語の(9a-b)などで見られるような本動詞として句以上のレベルで機能する *ol-*とは振る舞いが異なることを示唆している。

3.1 チュルク諸語のナル的表現

ナル的補助動詞は、事態を自動詞的に変換する働きを担うので、それに相当する形式をもつチュルク諸語は自動詞的把握という概念が適用可能かどうかを検証するための重要な材料になりうる。しかし、今までの研究では、補助動詞の *ol-*あるいは *bol-*の機能についての記述はあるが、実際にどのぐらいの頻度であられるのか、チュルク諸語内でそのあらわれ方はどのように異なるのかという観点からの分析はなかった。その理由の一つとして、比較をするための客観的基準がなかったことがあげられる。ナル的事態把握表現の出現頻度を客観的に比較するために、任意の二つの言語において、それぞれのナル的表現の生起位置がどの程度一致するかを数値化するために、カッパ係数(Cohen's kappa coefficient)による分析を実施した(Cohen 1960)。カッパ係数とは元々は医学の分野で、二人の医師がエックス線写真を判定して病理が認められるかどうかを判定するために開発された手法である。この係数を利用して任意の二つの言語において、それぞれのナル的表現の生起位置がどの程度一致するかを数値化する。具体的には、二つのテキスト間(日本語訳に基づくチュルク諸語の任意の二言語間)において *ol-/bol-/bo'1-*が対応することを「一致」とし、そのカッパ係数により算出された数値を「一致率」とする。世界の多くの言語に翻訳されている文学作品の『星の王子さま』を素材にして、チュルク諸語(トルコ語、アゼリ(アゼルバイジャン)語、トルクメン語、ウズベク語)に翻訳された際のテキストの比較を行った。四つのチュルク諸語での *ol-/bol-/bo'1-*の生起について、二つずつの組を作りながら確認した。日本語(野崎訳)の「ナル」の全ての生起箇所に対して、トルコ語訳、アゼリ語

訳、トルクメン語訳、ウズベク語訳間でどのように対応しているのかを調べ、一致係数を算出し、表1にまとめた。

表1. 言語の組み合わせと ol-/bol-/bo'l-の一致率

分類番号	言語名	言語名	カッパ 係数	一致の強さ*
[1]	ウズベク語	トルコ語	0.4488	Moderate
[2]	アゼリ語	トルクメン語	0.3774	Fair
[3]	トルコ語	アゼリ語	0.3659	Fair
[4]	トルクメン語	ウズベク語	0.3368	Fair
[5]	トルコ語	トルクメン語	0.2760	Fair
[6]	アゼリ語	ウズベク語	0.2647	Fair

*Poor < Fair < Moderate < Good < Very good

3.2 分析

以上の結果より得られた数値について分析する。言語の組み合わせの分類からは、[1], [2-4], [5-6]の3グループに分けることができ、この中で最も一致率が高いのが Moderate である[1]のトルコ語訳とウズベク語訳間である。[2-4] のグループは地理的に隣接しており、[5-6]のグループは地理的に離れている。なぜ[1]のみ一致率が高いのかは現時点では不明だが、ウズベク語訳の底本はロシア語であり、他のものとは異質であるところに原因があるのかもしれない。数値は Moderate の下限から Fair の上限から下限までを示すので、同じ ol-/bol-相当の形式をもつ言語の間であっても、均質ではないことがわかる。また集計結果からは、日本語の翻訳間でのナルの生起の一致率(.534~.430)は、チュルク語諸語間での ol-/bol-の生起の一致率(.4488~.2167)よりも高いと言えるので、日本語の翻訳の方が一致のばらつきが少なく、チュルク諸語間の方が一致のばらつきが大きいことを示している(栗林 2022)。

3.3 まとめ

日本語訳に基づく ol-/bol-/bo'l-の生起の一致率(カッパ係数)はトルコ語とウズベク語間が最も高く、アゼリ語とウズベク語間が最も低いと言える。チュルク諸語間でのあらわれ方は偏りがみられることがわかった。

4.1 活格言語

言語類型論で議論されているトピックの一つに格配列(case alignment)がある。その中でも、活格言語といわれる自動詞の項が動作主的に表示される場合と非動作主的に表示される場合がある言語に注目する。コーカサスのジョージア語の例を見ると行為的(Active)な項は活格 *ma* で表示され、非行為的(Inactive)な名詞は非活格 *i* で表示され、他動詞の目的語の表示と同じになる(Harris 2006:40)。

- (11) a. bavšv-eb-ma ičxub-es.
 child-PL-ACT quarreled-3PLS 「子供たちが喧嘩した。」
 b. bavšv-eb-i saxlši darč-nen.
 child-PL-INACT house.in stayed-3PLS 「子供たちが家にいた。」

活格の概念は Sapir (1917)で最初に導入され、日本では旧ソビエトの類型論研究の翻訳等で一般的に知られるようになった(クリモフ 1999)。近年では八丈島方言が活格タイプの格体系をもつとの報告がされ(まつもと 2011)、また古代日本語も一部で活格体系をあったとする議論もある (Yanagida & Whitman 2009)。活格言語の全体としては、必ずしも格体系にのみ表示される訳ではなく、述語に表示される文法的な一致と格表示の両方に具現化される場合(混合型)や、いずれか片方のみに具現化される場合(名詞型)もある(石田

表 2. 活格構文のタイプ

活格構文	動詞型 N-V <i>act</i>	混合型 N <i>act</i> -V <i>act</i>	名詞型 N <i>act</i> -V
非活格構文	動詞型 N-V <i>stat</i>	混合型 N <i>inact</i> -V <i>stat</i>	名詞型 N <i>inact</i> -V

Sapir (1917)の指摘したダコタ語の活格は動詞型の例で、ジョージア語の活格は混合型になる。また活格構文は、動詞により主語名詞が行為的か非行為的かが決定される分裂(split)自動詞主語タイプと、そのような決定は話者に委ねられている流動(fluid)自動詞主語タイプの二つに下位分類される (Dixon 1994:70-71)。流動自動詞主語タイプにおいては動詞に表示される文法的一致は活格型のパターンをとらない。八丈島方言には述語の一致はないので、格体系が部分的に活格パターンをとる例である。

世界の言語の格配列は、対格型が能格型よりも優勢で、活格型は極めて少ないと言われている (Comrie 2005:398-399)。実際に WALS online (<https://wals.info>) で「98A:名詞句の格配列」で検索すると Active - Inactive では4例 (バスク語、オーストロネシアのドレウ語、パプアニューギニアのイモンダ語、ジョージア語) がヒットし、「81A:SOV 語順」の条件でかけ合わせて検索すると、2例 (ジョージア語とバスク語) のみがヒットする。また、「100A:動詞の人称表示の配列」と「81A:SOV 語順」で検索すると、活格型は26例であり、そのうち「81A:SOV 語順」で検索すると SVO では6例、SOV が9例、優勢な語順なしが8例がヒットする。

4.2 ナルの言語の類型的位置づけ

北東チュルク諸語の状態変化の出来事スキーマとしては become と grow があり、特に前者は世界の言語の中で最も普及しており重要なカテゴリーであるとされる (Anderson 2006:359)。北東チュルク諸語では bol-「ナル」が相当し、状態変化からコピュラ、ダミー助動詞、可能性や蓋然性などのモーダルカテゴリーや進行形や起動相などの分析的なアスペクト形成に関わる。

トルコ語では ol-「なる」と et-「する」が形態的な対立をなすことを述べたが、これらは述語の語形変化の一部なので、表2での動詞型の活格構文と非活格構文に当てはまる。つまり、分析的な補助動詞として ol-と et-は形態的に述語に組み込まれ、ol-がつくと自動詞主語が被動者の意味になり、et-がつくと自動詞主語が動作主の意味になることで、自動詞主語の意味の選択に重要な役割を果たす。例をあげると、nakvt ol- vs. nakvt et- (knock out INACT- vs. knock out ACT-ノックアウトされた vs. ノックアウトした) の違いは補助動詞の選択に依存し、ol-と et-の形態的な異なりが inactive vs. active の対立に関わっている。さらに、コーカサスのバツ語は自動詞に二つの格の区別がある代表的な活格言語であるが (WALS では活格型言語に分類されていない)、ジョージア語などからの外来要素を動名詞として主に取り入れる分析的な動詞(analytic verb)がある (Holisky & Gagua 1994 =(67))。他動詞接辞-Dar: da=c'erad-Dar 'to write', 自動詞接辞-Dalar: mo=c'onad-Dalar 'to like', zulbad-Dalar 'to hate'。これらの分析的な動詞には他動詞化接辞や自動詞化接辞としての機能があり、自動詞化の-Dalar が付加されるとナル的表現のように非意志的な意味が付加される。その選択は話者に委ねられており、次のバツ語の一部の特徴である「流動自動詞主語タイプ」に関わる能格と絶対格の交替が話者の意志に委ねられているのと同様である。

(12) a. (as) vuiž-n-as
 1SG-ERG fell-AOR-1SG-ERG 「私はわざとこころんだ。」

 b. (so) vož-en-sO
 1SG-NOM fell-AOR-1SG-NOM 「私は思いがけなくこころんだ。」 (Holisky 1987:105)

トルコ語の一部のペアに見られる et-「する」と ol-「なる」の対立は動詞の意味により一義的に決定されているものではなく、話者により ol-か et-かの選択がされ、流動自動詞主語タイプの言語に類似した方略が用いられている。

このように分析するなら、「活格型的な言語」の定義とは動詞の格や動詞の一致だけでなく、補助動詞の選択にも拡大解釈することが可能で、世界の言語に広く見られる現象であると言える。全体的にナル的言語

が活格的になるには語順の条件と形態的な条件があり、基本語順(WO)はOV型が優勢であると共に言語のタイプ(Type)としては膠着的な形態構造(AGGL)を持つことが多い(表3)。従って、中国語やフランス語や英語のような非アルタイ型の屈折型(INFL)や孤立型(ISOL)の形態構造を持つ言語には、「ナル」と同じように出現頻度の高い助動詞がなぜ見られないか」に対する説明が可能である(徐 2025, Loïc・栗林 2025)。「活格的な言語」は日本語でも八丈島方言以外にも指摘され、近年では琉球方言や熊本方言の口語に見られる活格型のような格配列を分裂自動詞としているようである(竹内・下地 2019)。格活言語の本来の定義に基づくならば、文法的な一致を持たない日本語はこれに含まれることはない。しかし、表3で示したように、活格的な言語特徴、つまり自動詞主語が格や補助動詞の形態により分裂して反映されることに着目することにより、言語のタイプの全体的な中での当該現象の位置づけが可能になる。言語の対照研究を実施するには、以上のような形態・統語的なタイプを考慮することにより新たな類型的分類が可能になる。

表3. 言語のタイプ

	WO	Type	Case	Active	Fluid-S	V-AGR
現代日本語	SOV	AGGL	ACC		(clausal)	
八丈島方言	SOV	AGGL	ACC	✓		
古代日本語	SOV	AGGL	ACC	(clausal)		
トルコ語	SOV	AGGL	ACC		✓	✓
ジョージア語	SOV	AGGL	ERG	✓	✓	✓
フランス語	SVO	INFL	ACC			
中国語	SVO	ISOL	ACC			

()内は条件付き, AGGL=agglutinative, INFL=inflectional, ISOL=isolative, V-AGR=verbal agreement

4.3 まとめ

OV言語とVO言語でスルとナルの対立の頻度が異なることには、基本語順が深く関与することを示している。ナル的表現とはOV言語のアルタイ型の膠着的な形態的性質と深く関わる特徴である。一般的に活格言語は稀であるとされるが、活格の定義を拡大することにより、OV言語での自動詞に見られるスルとナルの対立は活格性の表れと捉えることができる。

5. 結び

本発表では主に、1) ナル的表現 ol-は自動詞として機能する場合以外に、補助動詞として機能する場合には語レベル、句レベル、文レベルに関わること、2) ol-/bol-/bo'l-の分布は同じチュルク諸語内であっても決して均一ではないこと、3) OV言語にナル的表現が多く見られ、主語が動作者か被動者/物かは補助動詞の選択に依存していること、を論じた。ナル的表現とは、自動詞主語を被行為者/物とするためのOV言語における一般的な方略であると捉えることが可能である。

*本研究は以下の研究プロジェクトによる成果の一部である： 科研費 16K02676, 18H03578, 23K00524, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同研究 2020.4~2023.3 「チュルク諸語における情報構造と知識管理—音韻・形態統語・意味のインターフェース—」。

略記号

ABL: ablative, ACT: active, AOR: aorist, CM: compound marker, DAT: dative, ERG: eragative, FUT: future, GEN: genitive, GER: gerundive, HS: hear say, INACT: inactive, LOC: locative, NEG: negative, NMZ: nominalizer, NOM: nominative, PFT: perfect, PROG: progressive, PST: past, RP: relative pronoun, VLZ: verbalizer

テキスト

- [1] 野崎 敏 (訳) (2006) 『ちいさな王子』 光文社古典新訳文庫
- [2] Ağrıyürüyen, Sumru (çev.) (1987) Antoine de Saint-Exupéry: *Küçük Prenses*. Mavibulut Yayıncılık. [トルコ語版]
- [3] D. Antuan (tarj.) Xayriddin Sulton; so‘ngso‘z muallifi Bahodir Ermatov (2007) *Kichkina shahzoda: Sent-Ekzyuperi*. Ma‘naviyat. ウズベク語版
- [4] Əziz Gözəlsoy (tərcümə) (2003) *Balaca Şahzadə: Antuan dö Sənt-Ekzüperi*. Yaqut Qurbanova. [アゼリ語版]
- [5] Serdar HOJAÝEW (terjime) (2016) *Kiçjik şazada: Antuan de Sent Ekzüperi*. [トルクメン語版]
- [6] *Gagauz dili hem literatura 7 klasa deyni* (GAGAUZ DİLİ)
(https://mecc.gov.md/sites/default/files/limba_si_lit_gagauza_gimnaziu.pdf)
- [7] ANA SÖZÜ. (<https://anasozu.com/gagauz-sarap-yortusu-2024-suukta-cii-hem-ciskin-havada-olan-bir-sennik/>)
2025/10/31 最終アクセス.

引用文献

- [1] まつもと ひろたけ (2011) 「内容類型学と琉球方言」 中日理論言語学会 (2011.7.3).
- [2] 石田修一 (2019) 「人類史における活格言語、能格言語 —内容類型学の視点から—」『類型学研究』 5: 79-156.
- [3] 池上嘉彦 (2025) 「ナル的表現と事態把握」 守屋・池上他(編)『ナル的表現をめぐる通言語的研究』 ひつじ書房 pp. 317-335 所収.
- [4] クリモフ, G. A. (1999) 『新しい言語類型学—活格構造言語とは何か』 (石田修一訳) 三省堂 (原著 1977 年刊行)
- [5] 竹内史郎・下地理則 (編) (2019) 『日本語の格表示と分裂自動詞性』 くろしお出版.
- [6] Anderson, G. (2006) *Auxiliary Verb Constructions*. Oxford University Press.
- [7] Cohen, J. 1960. A coefficient of agreement for nominal scales. *Educational and Psychological Measurement* 20, 37-46.
- [8] Comrie, B. (2005) Alignment of Case Marking. In: Haspelmath et al. (eds.) *The world atlas of language structures*. Oxford University Press.
- [9] Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge University Press.
- [10] Harris, C. (2006) Active/Inactive marking. Brown, K. (ed.) *Encyclopedia of Language and Linguistics*, 40-43. Elsevier.
- [11] Holisky, D. A. (1987) The case of the intransitive subject in Tsova-Tush (Batsbi), *Lingua* 71, 103-132.
- [12] Holisky, D. A. and Gagaa, R. (1994) Tsova-Tush (Batsbi). In Smeets, R. (ed.), *The indigenous languages of the Caucasus* 4, 147-212.
- [13] 徐一平 (2025) 「中国語における「ナル表現」」 守屋 他編 (2025) pp.209-215 所収.
- [14] 影山太郎 (2021) 『点と線の言語学—言語類型から見た日本語の本質—』 くろしお出版
- [15] 栗林裕 (2022) 「チュルク諸語の事態把握表現の数量的比較に向けての試論」 久保智之・菅原睦・江畑冬生・大崎紀子 (編) *Contribution to the Studies of Eurasian Languages series (CSEL)* Vol. 23, pp.65-82.
- [16] 栗林裕 (2024) 「ナル的表現と言語類型論」『日本認知言語学会論文集第 24 巻』 pp.591-595.
- [17] 栗林裕 (2025) 「トルコ語のナル的表現」 守屋 他編 (2025) pp.35-43 所収.
- [18] Loïc, Renoud・栗林裕 (2025) 「星の王子さま」から見えること：仏語と日本語」 守屋 他編 (2025) pp.297-303 所収.
- [19] 守屋三千代, 池上嘉彦, 角道正佳, 栗林裕, 岡智之, 宮岸哲也 編 (2025) 『ナル的表現をめぐる通言語的研究: 認知言語学と哲学を視野に入れて』 ひつじ書房.
- [20] Sapir, E. (1917) Review of C. C. Uhlenbeck. *International Journal of American Linguistics* 1, 82–86.
- [21] Yanagida, Y. & J. Whitman (2009) Alignment and word order in Old Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 18, 101–144.